



難波西鶴と

海の道

【67】

森田 雅也

前回は「好色五人女」(168)「恋の山嶽」(169)「武道伝来記」(170)「西鶴物語」(171)の話をハッピーエンドでしたが、源五兵衛が譲り受けた、おまんの手紙が「琉球屋」の庭蔵に眠るお宝は珍品ばかりでした。その部分を引用します。

「人魚の塩引・めのふの手桶・かんたんの米かち杵・浦嶋が座丁箱・井才天の前巾着・福祿寿の剃刀・多門天の枕鑑・大黒殿の千石とをし・及び殿の小遣帳、覚へがたし。世に有ほどの万宝、ない物はな

これには深い意味はなく、西鶴がよく用いている、俳諧的付け合い法、つまり、イメージの連鎖といえるかもしれません。

三つ目の「かんたんの米かち杵」がそうです。「かんたん」は「邯鄲の夢」の故事を指します。これは、虚生という貧乏な青年が越の都邯鄲の宿でうたた寝をする間に、五十余年の富貴を極めた一生の夢をみたが、それは、宿の亭主が粟粥を炊きあげるほどの短い間であった、という話です。「米かち杵」とは、その折、米の精白に使った「杵」を指していますが、あり得ないことで連想の遊びですね。

実在の抜け荷商人象徴か

短い手鏡。「大黒殿の千石とをし」は、大黒様につきものの米俵から、米のふるいの連想。「及び殿の小遣帳」は、商売繁盛の神のイメージから、各々、付け合いの遊びにすぎないのです。

でも、二つ目の「めのふの手桶」は、高価なめのふの洗面器ですから、存在しないにしても、舶来品商いの象徴でしょう。

すると、「人魚の塩引」とは？ 案外と実際に、沖繩に生息するシュゴンあたりを「人魚」と呼び、希少な珍味として取引していたのではないのでしょうか。それを乾物として所有する異常さ。

そうすると「琉球屋」。禁制品でもうけた実在の抜け荷商人がモデルだったのでは？ 考えすぎでしょうか。

(関西学院大学文学部文学言語学科教授)

「琉球屋」に眠る数々の珍品

しかし、「好色五人女」の諸注が指摘するように、

「人魚の塩引」との諸注が指摘するように、

「好色五人女」の諸注が指摘するように、